



人材不足により、感染症対策のみならず基礎的な保健・医療サービスが遅れているミャンマー。JICAは基礎保健スタッフの育成に協力している



サイクロン・ナルギスで被災したデルタ地帯では、農業生産の回復に向け、堤防の修復などを通じた支援を行っている



農業と並ぶ水産業はミャンマーの主要産業。JICAは貧困対策として、小規模養殖の普及にも取り組んでいる

**山積みの課題
地道な日本の支援**

一方で、ミャンマーの1人当たりGDPは約740ドル。これは、日本の2%にも満たない数値だ。当然ながら、道路や港、電力、上下水道などの基礎インフラも十分に整備されていない。さらには、08年にサイクロン・ナルギスが直撃し、14万人に上る死者・行方不明者が発生。被災者は240万人に及ん

でおり、復旧・復興を含め、発展に向け克服しなければならぬ課題は多い。

そこでJICAは、ミャンマーに対して保健、教育、農業、地方給水、防災、社会的弱者の保護など、緊急性の高い人道支援を中心に展開。保健分野では、感染者数が33万人にも達するHIV/エイズや、死因の1位・2位を占める結核・マラリアなどの感染症対策を適切に行うための体制強化・人材育成を行ってきた。また、広大な農地がありながらもコメ生産に偏っていた農業については、地域の特性を生かした作物や技術を普及。ナルギスからの復旧・復興に向けて、国内最大の物流拠点となっているヤンゴン港の改修、農業地帯のエーヤワディーの生産回復に協力している。さらに、民主化・市場経済化を支える若手行政官の育成とし

**ASEAN共同体
ミャンマー発展のチャンスに**



ウインストン・ミャンマー大統領
経済アドバイザー

ASEAN共同体の発足は、ミャンマーにとって大きなチャンスであると同時に、挑戦でもあります。統合にはメリットとデメリットが付きもの。ミャンマー国内の産業や金融などへのマイナスの影響も避けられないと思いますが、実効的な政策があれば影響は軽減できると考えています。

ミャンマーは依然、多くの課題に直面しています。長期間、国際社会との距離があったこともあり、物事を迅速かつ着実に進めていく能力が十分ではありません。ですが、他のASEAN諸国に追いつこうと努力を重ね、2011年3月にテイン・セイン大統領率いる新政権が発足してからは、ASEAN共同体の重要性をこれまで以上に認識しています。今後は国際社会からの支援も得ながら、予定通り2015年もしくは2018年の参画を目指していきたいと思っています。

日本からの支援にも期待しています。さまざまな分野での技術協力は、政策策定の能力強化になりますし、ビジネス面で両国が連携していくことは民間企業が新たな経験を積む機会を増やし、これがミャンマー国内の人材育成につながります。またASEAN連結性の点から、それを推進していくための人材の育成は重要だと考えています。

(注)人口、1人当たりGDP(推計値)の典拠はIMF(2010年)

JICAのプロジェクトや研修事業で日本の橋梁技術を学んだハン・ゾー氏。その後、国内で数多くの橋梁建設の指揮を執り、後進の指導に当たってきた



て日本の大学院への留学を支援している。

**過去の協力が
信頼へとつながる**

そして、ミャンマーだけでなく、ASEAN全体の発展のカギとなるのがインフラの整備だ。JICAは79〜88年、橋梁技術者を養成するための技術協力プロジェクトを実施。研修事業を通じて数多くの技術者を日本に受け入れてきた。その参加者の一人、元建設省公共事業局長で昨年土木学会国際貢献賞を受賞した、前ミャンマー土木工学会会長のハン・ゾー氏は、「海外からの援助がほとんどなかったこの20年間、自分の国のことは自分たちで」という方針のもと、国内の技術や人材を活用してインフラ整備を進めてきました」と話す。厳しい環境の中で陣頭指揮を執り、国内の橋梁建設を進めてきたハン・ゾー氏。「日本から学んだ実践的な知識は、自分たちでプロジェクトを実施する上で大きな自信になりました。壁にぶつかっても、日本人技術者に教わった『頑張る精神』で乗り越えることができた」。マグウェイ地域でエーヤワディー川に架かる全長2740メートルの橋も、ハン・ゾー氏が指揮を執り完成させたものだ。

日本の過去の協力の財産がこうしてミャンマーに息づいている。「ASEAN各国へつながる道路や港湾、鉄道などのインフラ整備に対するJICAの協力に期待している」とハン・ゾー氏。日本の技術が信頼されている証しだ。

陸路・海路の両面でASEAN連結性の強化に重要な存在であるミャンマー。今後の動きに注目していきたい。

古くは「ビルマの堅琴」で知られる仏教国ミャンマー。豊かな自然と国内に点在するパゴダ(仏塔)は、訪れた者を魅了する。ASEAN10カ国の中で経済規模(GDP・国内総生産)は7番目、1人当たりGDPは最も小さいが、総人口6100万人はインドネシア、フィリピン、ベトナム、タイに次いで第5位。国土を南北に流れるエーヤワディー川の恵みを受けて肥沃な大地が広がり、天然ガスといった資源にも恵まれるなど、成長のポ

**連結性の強化に
重要な国**

テンシヤルは高い。またミャンマーは、1988年から軍事政権が続く独裁国家だったが、昨年実施された総選挙で民主的に大統領が選出され、新政権が発足。民主化運動の指導者であるアウン・サン・スー・チー女史の自宅軟禁措置も解除され、この1〜2年で民主化に向けた明るい兆しが見え始めている。

そして今、この動きに世界が注目。「ASEAN連結性」を強化する上で地政学的に重要な位置にあるミャンマーへの期待は高まる一方だ。ホーチミン・プノンペン・バンコクの3カ国の主要都市をつ

なぐ「南部経済回廊」と、インドシナ半島の中部を東西に横断する「東西経済回廊」の西側の玄関口となるのがミャンマーであり、ベンガル湾につながる港とタイ国境までの道路の整備が進めば、ASEAN地域の最東にあるベトナムからインド、その先の中東やヨーロッパへと、成長への道が広がるからだ。

この2つの経済回廊には、これまでJICAも積極的に支援(8ページに関連記事)。魅力的な投資先として、投資・事業展開に対する日本経済界の関心も高まっている。



最大都市ヤンゴンに建つシュエダゴン・パゴダ

ミャンマー
from **MYANMAR**
発展のカギを握る
西の玄関口

ASEANの西側に位置し、同地域の玄関口となるミャンマーは、「ASEAN連結性」を考える上で重要な存在だ。このところ民主化に向けた動きが伝えられる中、日本の支援に対する期待も高まっている。



南部回廊の西の玄関口・ダウェイ港につながる道路の整備は、ASEAN連結性にとって重要